ホワイトクリスマスと満天の星

平口　哲夫

若草教会五十年史で森野牧師時代のことを何か書くように頼まれたものですから、記憶を呼び戻すために〈すなどり〉をめくっていますと、第二一号（一九六二年十二月）に掲載された「私のクリスマス」と題する拙文が目にとまりました。

「クリスマスと言えばすぐ思い出すのがイヴのキャロル。私がそれに初めて参加した時は、雪が程良く積もっていてホワイトクリスマスの良さ十分、以後、雪無しでは寂しい気がする（中略）程でした。」

これは受洗した高校二年のときの文章ですが、いまクリスマスの思い出をきかれてもやはり同じような感慨をもちます。「私の信仰生活はどうしても波を描いてしまいます。しかし、神がその時々において私を強めて下さらなかったならば、ただ下向きな線しか描かないことになるでしょう。（中略）波の谷間の私を光に照らされた所までどうか導き上げてください」という末尾の言葉は、三十年以上たったいまも私にとって切実な祈りなのです。

ホワイトクリスマスにつづく私の連想は、まったく季節はずれですが、真夏の海の星空に一転します。どちらも教会に行きはじめた年の印象深い体験に根ざしているからでしょう。中学二年時（一九五九）の教会学校夏期修養会は中学科と高等科との合同で行われました。合同修養会は最初から計画されたものではなく、どちらも人数不足だからいっしょにやろうと、間近になって決まったことです。宇ノ気海岸でキャンプしながらの修養会でした。俵（守彦）先生・出口先生・高森先生に引率されて参加した生徒たちは、確か高等科から山村兄のほか女子数人、中等科から藤田君・山野君そして私の計男子三名であったように思います。アメリカ人女性を連れて番匠姉ら先輩方も数人、部分参加してくださったように記憶しています。私にとってキャンプ自体が初めてでしたので、アセチレンガスの臭いもふくめて、何もかもがたいへん印象的でした。前に〈すなどり〉に少し書いたように、演劇部にいたせいか、ませた議論には多少慣れていたとはいえ、ずっと大人びた感じのお姉さんたちを交えての修養会ではやはり勝手が違います。それはともかく、キャンプファイヤーの炎がしずまって、ふと見上げた満天の星の輝きを忘れることができません。

北陸の地ではクリスマスイヴに星空を見ることはめったにありませんが、二つの思い出が重なって、いまでもクリスマスときくとあたかもカードに描いたような光景が目に浮かぶのです。

（すなどり一三九号、一九九六）